# 高等学校男女共学に対する意識調査(第1報)
## －別学高校出身者と共学高校出身者の比較－

武　藤　八恵子（家庭科教育）
羽　田　貴　史（教　育　学）

## Ⅰ　緒　　言

第2次世界大戦後の日本の教育制度はアメリカ占領軍の指導のもとに、民主々義国家の成立をめざして「教育機会の均等化」が図られ、総合制学区制共学制のいわゆる高校三原則にもとづく新制高校が発足する。しかしその実施状況は地域（県）によって必ずしも同じではなかった。特に男女共学制は「新制高等学校実施の手引き」(文部省1947)にみられるように地方の実情にもとづき別学校でも差支えないとされた。またＧＨＱ（連合軍総司令部）の下部組織である地方軍政部の対応の違いが都道府県の違いをもたらし、その事情は阿部氏[1]の著書に詳しい。しかしそれらの違いをもたらせた大きな理由のひとつには、県の教育行政当局者や地域住民の性差別観やこれに基づく性別役割意識があげられる。そしてこれらを基層として戦前の女子教育の遅れが男女共学制の導入に、高校統合問題を紛糾させ、伝統固守を叫ばせ、母校存続の情が糖衣の役割を果し、戦前の学校制度を温存させた福島県の状況は先行研究[2]に詳述した。

生徒在籍を性別によって制限をするいわゆる別学校の存在は歴史的にみても男らしさ、女らしさを作り上げようとした戦前の教育制度の遺産であり、性別役割観をつくりあげ、男女の相互理解の障害をもたらすものと考えられる。1970年以降多くの別学校が共学校に移行しつつあり[3]、国際的にも男女両性が共生する社会をめざしつつある現代にあって、公立学校普通科の別学校数が際立って多い福島県の学習主体者である生徒自身が男女共学についてどのような意識をもっているかを知ることは、高校教育のあり方を考えるために重要な資料になると考え、高校における男女共学についての意識調査を福島大学学生によっておこなう。

高校教育の問題を高校生自身ではなく、大学生を対象としたのは高校生活を客観的に回顧できる年令（発達段階）であると考えたからである。また福島大学学生は福島県高校生を代表するグループではなく、また福島県出身者だけではない。できれば対象者の種類を多く求めて、本調査の目的を達成したいと考えるが、今回福島大学学生の結果をまとめたので報告する。

## Ⅱ　調査方法

1. 調査時期　1992年4月～5月
2. 調査方法　自記式アンケートによる集団調査
3. 調査対象　福島大学教育、経済、行政社会部2年生 976名（夜間主もふくむ）
4. 回 収 数　767名（回収率78.6%）
5. 調査者の属性　図1に示す

## Ⅲ　調査結果と考察

調査結果は性別による出身高校の学校形態別と各項目間のクロス集計をして考察する。学習形態

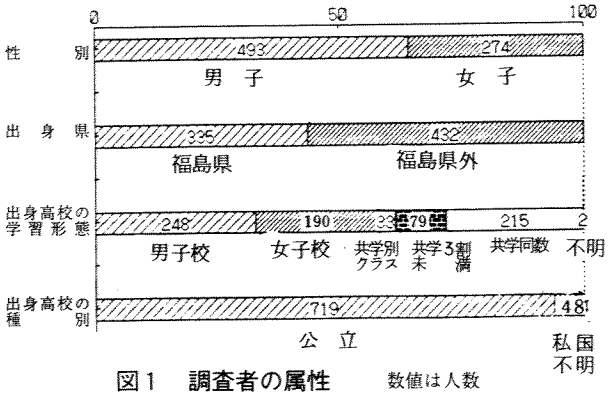



図1　調査者の属性　　数値は人数

は男子校、女子校及び共学校を共学でも性別によってクラスが違う形態（共学別クラスと表記）、どちらかの性が30％未満しか在籍しない場合（共学3割未満と表記）、どちらかの性が31％～69％在籍している場合（共学同数と表記）に分別する。共学別クラス及び共学3割未満の共学形態は問題がある[5]ので回答の結果に差がでることも考え、以上のように分別した。

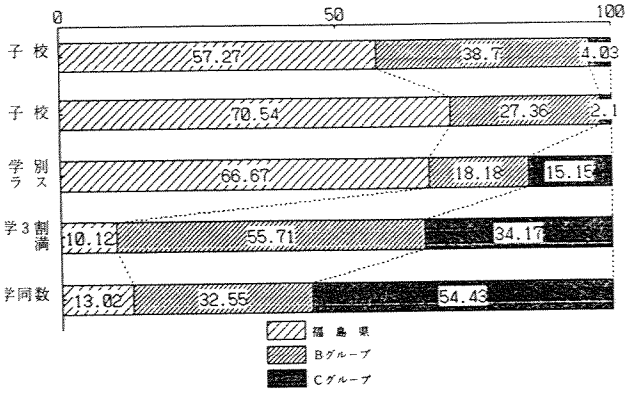
考察は主として男子の場合、男子校と共学同数を、女子の場合、女子校と共学同数の結果を比較検討する（別学校出身者、共学校出身者と表記）。クロス集計の結果は$\chi^2$検定をし、危険率5％以下を差があるとし、5％に近い危険率の場合、傾向があるとする。

## 1．出　身　県

福島県以外の出身県は先行調査[2]に従って、別学校が多く存在する県をBグループ、別学校の少ない県をCグループとして集計し、結果を図2に示す。

福島県出身の場合、別学校出身者が男子57.3％女子70.5％となり、性別同数の共学校出身者は13％に過ぎない。共学別クラス出身者も多い。福島大学学生の場合共学出身者は殆ど他県出身者であるといえる。学部別人数は分別してないが、約⅓が教育学部生であり、別学出身者が福島県の共学の小・中・高校に勤務することが推測され、この結果も福島県別学校の存在が構造的問題をもつことが示唆される。（図2参照）

図2　学習形態別の出身県




## 2．高校生活の回顧

(1) あなたの高校生活はどうでしたか

(2) あなたの高校生活はどのような点がよかったか、近い理由を下の項目から2つまであげて下さい。

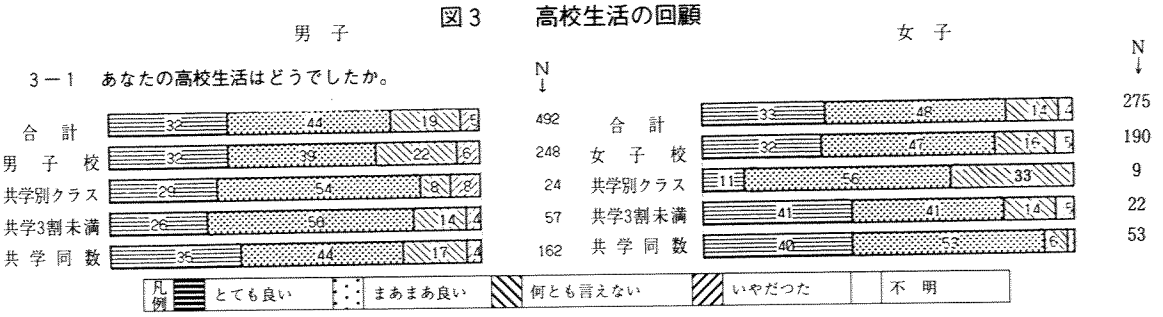
(3) あなたの高校生活はどのような点がいやだったか、近い理由を下の項目から2つまであげて下さい。

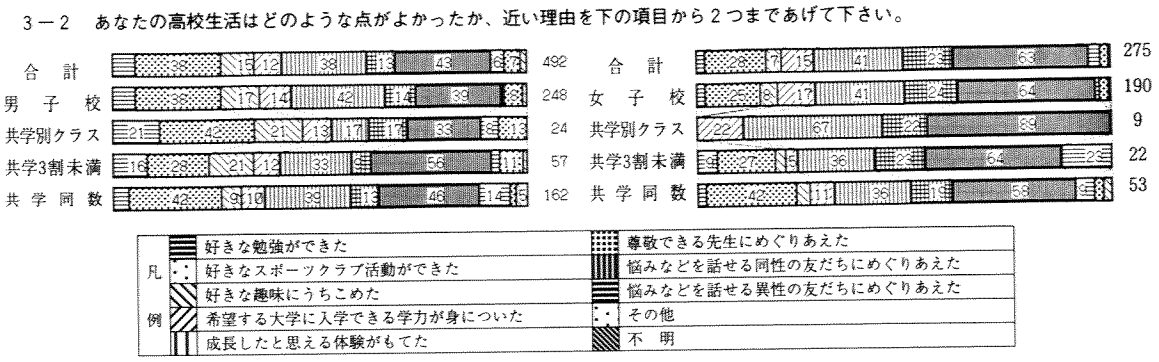
設問に対する回答を図3に示す。高校生活を回顧する時、その評価について男子は別学校出身者と共学校出身者で差はないが、女子では共学校出身者の評価は別学校出身者に比べ「よかった」が多く「いやだった」が少ない傾向がある。特に目立つのは調査数が少ないが共学別クラスの「とても良い」が極端に少ないことである。（図3－1参照）

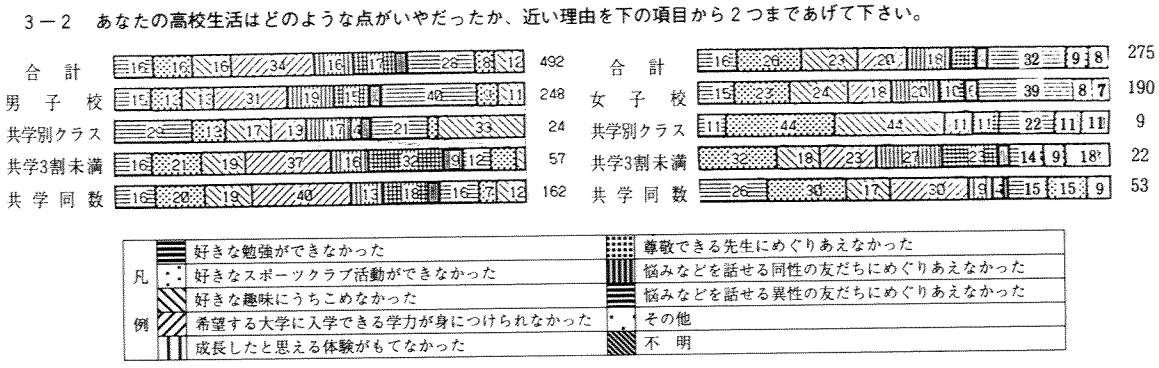
この評価の理由について男子と女子では違った傾向が見られる。男子の別学校出身者は共学校出身者より「よかった」として「自分の趣味に打ち込めた」をあげる学生が多く、また「いやだった」理由として「異性の友だちにめぐりあえなかった」をあげる学生が多い。

男子の共学出身者は「よかった」理由に異性の友だちは無論のこと「同性の友だちにめぐりあえた」ことをあげ、「いやだった」理由として「学力が身につけられなかった」ことをあげ、これらの項目の選択には別学出身者と共学出身者で大きな差がある。この状況から孤立化している別学校男子高校生と高校の学力序列のもとで大学入試に十分対応できないで悩んでいる共学校男子高校生がうかんでくる。　一方女子の場合、別学校出身者は「いやだった」理由として「異性の友だちにめぐりあえなかった」を挙げる学生が非常に多く、共学校出身者は「好きな勉強ができなかった」「学力が身につけられなかった」を挙げ、共学校出身者は「よかった」とする理由として「クラブ活動ができた」は多いが「尊敬できる先生にめぐりあえた」や「同性の友だちにめぐりあえた」は別学校出身者より少ない傾向がみられる。この状況から同性の友だちと楽しく高校生活をおくりながら異性の友だちにめぐりあえないことを非常に残念に思っている別学女子高校生と部活動に熱中しながらも勉学に対応できずに苛立つ共学女子高校生の姿が想像できる。（図3－2、3－3参照）

## 図3　高校生活の回顧




(4) あなたの高校が男女共学（男女別学）であったことについてどう思いますか。

前項の高校生活全般に対する評価に比べ、出身の学校形態の評価については別学校出身者と共学校出身者では大きな差がある。別学校出身者が別学を「よかった」とする学生は男女それぞれ48%、56%であるのに対し、共学校出身者が共学を「よかった」とする者は78%、91%であり、「いやだった」とする者は0.6 %、1.9 %に過ぎない。それに対し別学校出身者は17%、14.3%が「いやだった」としている。高校の評価を即共学が別学かの評価に考察する調査[6]もみられるが、高校生活全般の評価も含んでいる場合には、形態への評価と混淆してしまうこともあると考えられ配慮が必要になる。

この項目でも目立つのが女子共学別クラスの評価の「よかった」の割合が少ないことである。（3－4参照）

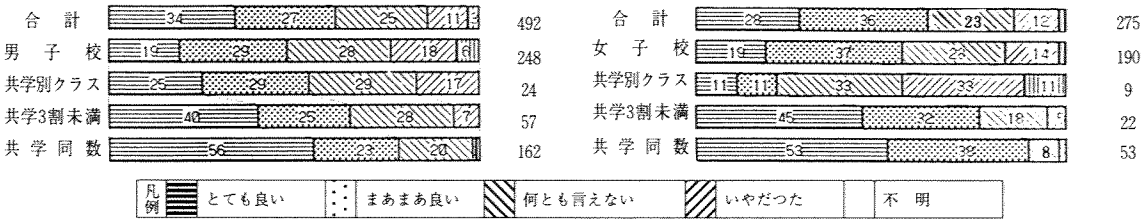
(5) 高校進学の選択に男女共学・別学を考慮しましたか。

別学であることを考慮した者は男女それぞれ4%、1.6 %であり、別学校に進学した生徒の殆どが別学を選んでの選択ではない。共学校出身者が「共学であることを考慮した」選択が14%、30%であることから、高校進学の選択への中学生の希望がうかがえ、いわゆる進学校に別学校が多い福島県の状況は、中学生の高校選択権を侵害しているといえる。（図3－5参照）

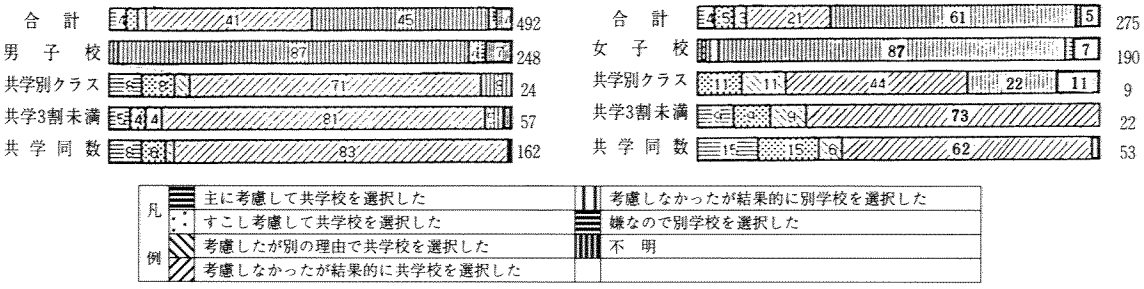
図3　高校生活の回顧

男子　　女子

3－4　あなたの高校が男女共学（男女別学）であったことについてどう思いますか。




3－5　あなたの高校が進学の選択に男女共学・別学）を考慮しましたか。




## 3.別学に対する意見

「高校の男女別学について、次の意見に対してあなたはどのように考えますか」として、ア～サの項目に「そう思う、そう思わない、わからない」から選択させた。項目の順序はランダムである。結果を図4に示す。この項目では学校形態による差を$\chi^2$検定で比較せず、各項目ついて形態別の状況を把握した。

別学・共学の利点や問題点に対する学生の意見として次のように考察できる。

(1) 別学校の利点に対する意見

いままであまり根拠は明確ではないが、別学の利点として(ア) 異性を気にせずのびのびでき気楽である　(イ) 勉強に集中できる　(ウ) 異性に遠慮せず能力が発揮できる　(エ) 不純異性交遊が起きにくい　などがあげられてきた。

(ア) について別学校出身者の⅔以上が同意している。これに対し共学校出身者は半数が「そう思わない」と否定し、実際の共学体験があるかどうかで差がみられる。 気楽であるという認識には、中学生時代の状況や異性に対する緊張状態を示すとも考えられる。男子より女子に「そう思う」が多い。（図4（ア）参照）

(イ)(ウ)(エ) については別学校出身者すら否定する者が男子それぞれ62%、49%、64%、女子67%、42%、77%であり、これらの項目は別学の利点として認識されていない。（図4－2、3、4参照）

(2) 別学校の問題点に対する意見

別学の問題点としてあげた(オ) 同性だけなので視野が狭くなる　(カ) 異性とのコミニュケーションの方法がわからなくなるについては別学校出身者が大きく肯定している。ここで興味深いのは(カ) について別学校出身者の方が共学出身者より「そう思う」が多いことで、女子の場合(オ)もそのような傾向である。つまり別学校出身者の方が共学校出身者よりこの問題点を肯定していることである。共学校出身者が共学での体験の実態からの把握に対して別学校出身者は、これらについてかなり不安をもっているのではないかと考える。（図4－オ、4－カ参照）

また(キ) 異性に思いやりをもつ態度を学びにくいについては別学校出身者も否定しているが、(ク) 別学は異性を互いに理解できなくなるについて、女子別学校出身者では「そう思う」の割合が高い。（図4－キ、4－ク参照）

共学の利点としてあげた(ケ) 異性が一緒の方が互いに高めあえるについては、別学校出身者も共学校出身者も「そう思う」割合が低いが、別学校出身者の方が賛意は高い。

以上の結果から、異性との交流、相互理解に関して別学校出身者は不安感が強く、特に女子についてその傾向が大きいといえる。

(3) 別学校の存在に対する意見

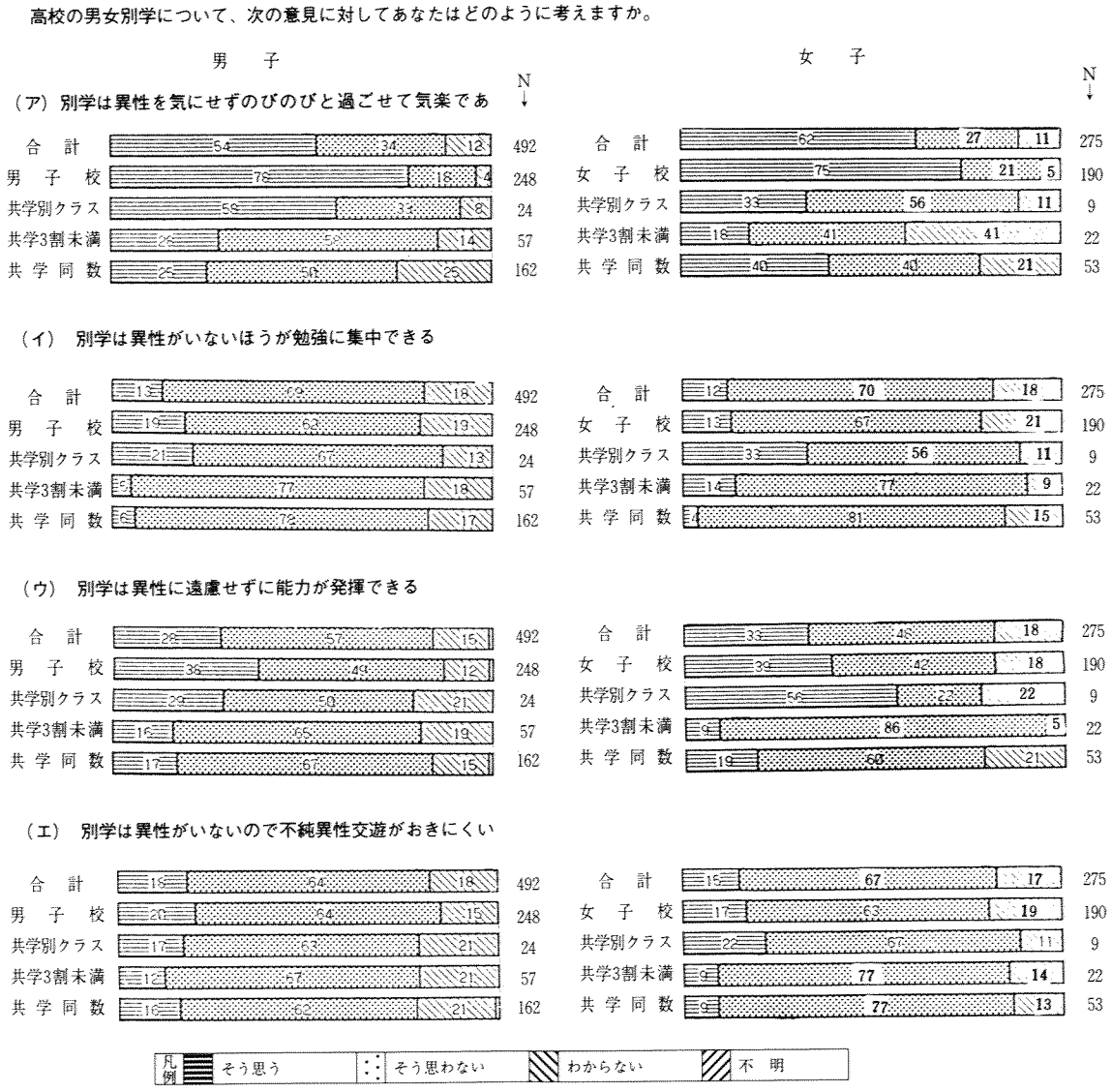
(コ) 男女平等の社会に別学はふさわしくないに対する意見は「そう思う」は別学校出身者は男子37.5%女子36.7%で「そう思わない」の48.8%41.3%に比べ多くはない。共学校出身者の「そう思う」は54.3%、50.9%になる。

(サ) 別学の伝統は守ってゆかなければならないに対して、別学校出身者の「そう思う」は男子13.3%女子6.3 %と低くなり、共学校出身者は更に低率である。

この2問からみると別学校出身者は共学校出身者より現在の学校制度への問題意識はやや低いものの福島県別学校存続の理念とされる伝統固守に学生は低い賛意しか示さず、よくいわれる伝統論は大人社会の押しつけともいえる。

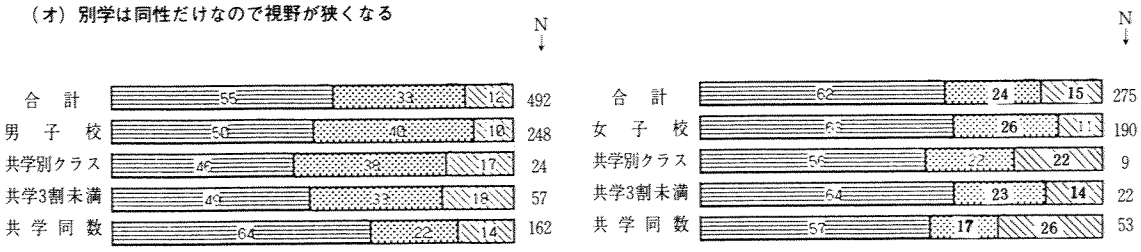
以上の結果から学生達は高校の別学について積極的に肯定せず、別学校出身者は異性との人間的交流に強い不安感をもっているといえる。

図4　別学に対する意見

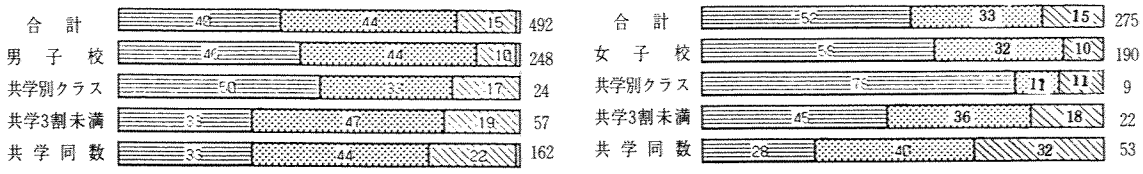


男子　　女子

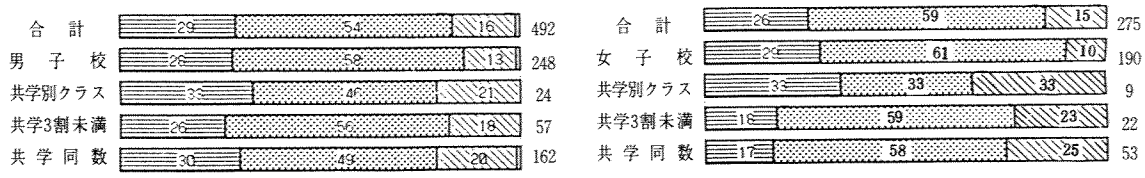
（オ）別学は同性だけなので視野が狭くなる



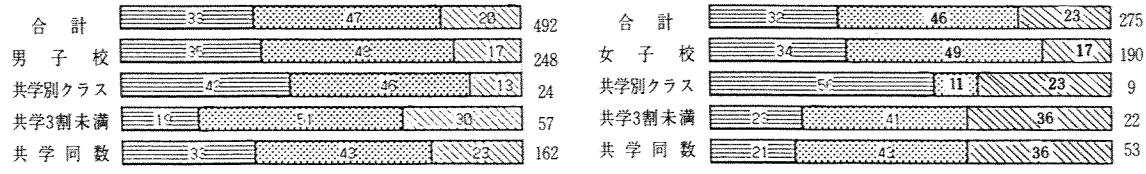

（カ）別学は異性とのコミュニケーションの方法やきっかけがわからなくなる

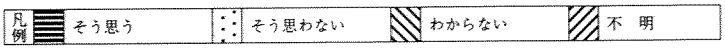



（キ）別学は異性に思いやりをもつ態度を学びにくい




（ク）別学は異性を互いによく理解できなくなる



## 4．性役割観

男女を差別して教育をした第2次世界大戦前の学校制度は、男女の役割への期待によって生じたものである。「男は仕事、女は家庭」と人間の将来像を規定することによって、それに必要とする資質を男女別のカリキュラムで育成しようとした事が別学校成立の基層といえる。女性の自立への志向が共学要求へ発展してゆく歴史的経緯をみる時、性別役割が共学・別学という学校形態の論議にとって重要な視点となる。

(1)「男は外で働き、女は家庭を守るべき」という人がいます。あなたはこの考えについてどう思いますか。

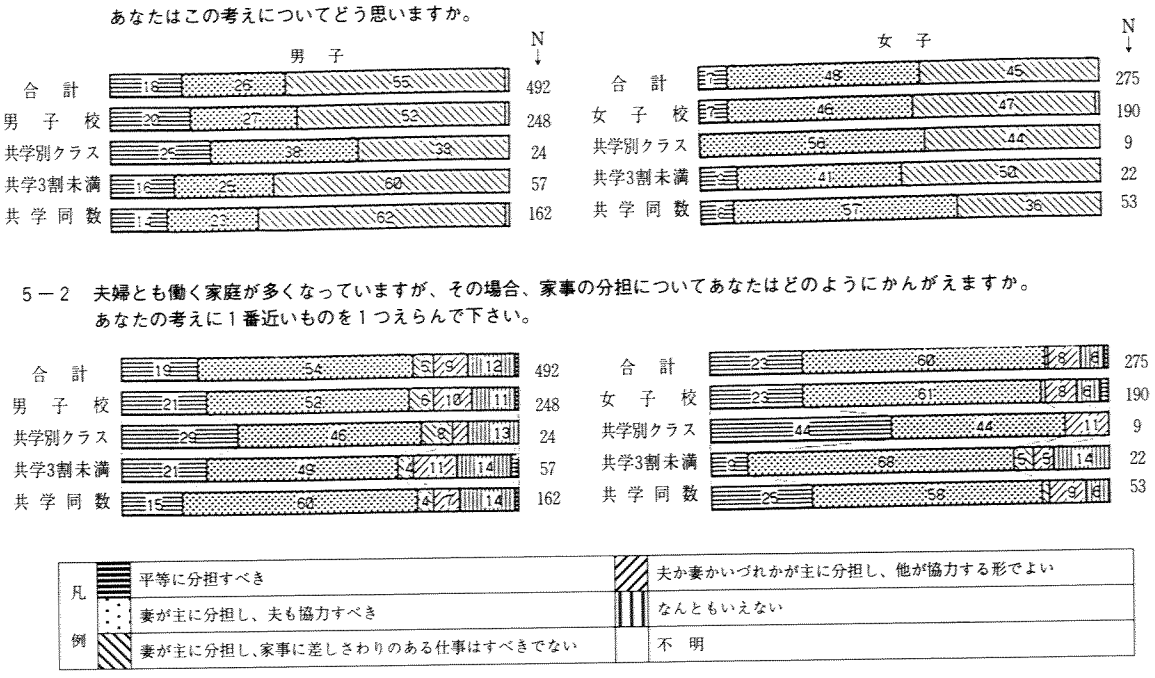
「賛成」とする者は、男子の別学校出身者の方が共学校出身者より多く、「反対」も別学校出身者の方が多く、別学校出身者と共学校出身者には差がある傾向がみられる。そしてこの差の傾向は下位検定によれば「何とも言えない」の違いによってもたらされたものであり、女子の場合は別学校出身者・共学校出身者で差はない。

(2) 夫婦とも働く家庭が多くなっていますが、その場合、家事の分担についてあなたはどのように考えますか。あなたの考えに一番近いものをひとつ選んで下さい。

性役割分担意識にこだわらない「平等に分担すべき」と「いずれかが主に分担し他が協力すればよい」を合わせた回答は別学校出身者が共学校出身者より多く、「妻が主に分担し夫も協力すべきだ」がやや少ない。女子の場合は両者に差はなかった。つまり、男子別学校出身者はこの意識には個人差が大きいといえる。

この2間からだけで判断するのは少々無理であるか、本調査対象者の場合、性役割観は個人差があるといえる。そして注目すべきは男女の差であり、全国調査との差である。日本の青年意識調査[7] (1989) と比較すると、問(1) について本調査者は賛成も少なく反対も少なく「何ともいえない」の回答が男子の場合2倍以上になる。女子も反対は多いものの「なんともいえない」割合は多い。「なんともいえない」という回答は賛成とも反対ともいえないでいる価値観のゆらぎを示すとも考えられ、固定的役割観の脱皮を図ろうとする過程[8]とも考えられる。前項の不安感とも併せ、男子別学校出身者は大学生になって自分の性役割認識の変革をせまられつつあり、明確な価値判断

図5　性役割観



がもてないでいる状態と考える。男女共生が求められる社会にあって性役割に対するアイデンティティを確立する学習が青年期に必要であることが考えられる。（図５－１　図５－２参照）

## ５．異　性　観

共学制によって変革することのひとつとして異性観（男女観）がある。男女交流がままならない状況では夢想するしかない異性への感情が、共学による交流の中で男女間の友情、恋愛、結婚に対する考え方を確立してゆくと考える。本調査では紙数の関係でその一部について回答を求めた。

(1) あなたは親しい友人がいますか。もしいる場合、その友人は同性ですか異性ですか。それとも両方ですか。

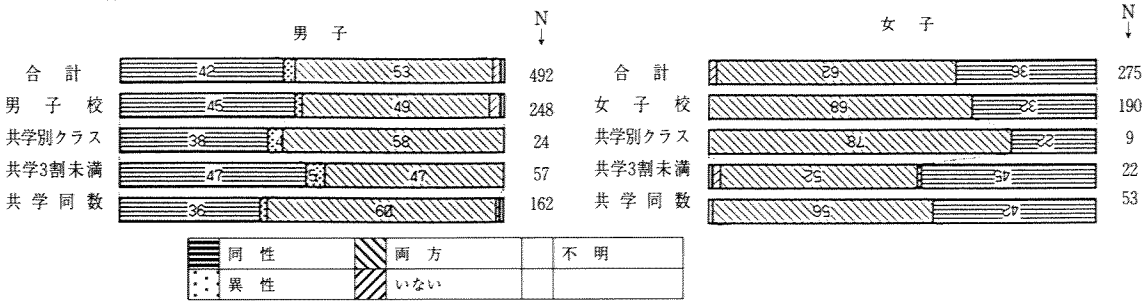
「両方いる」とした者は男女とも共学校出身者が多い。親しい友人の居所は尋ねていないが、別学校出身者は大学生活一年間の期間で親しい異性の友人はつくれなかったと思われる。性を殊さら意識せず自然に交際することはできにくいのであろう。

(2) あなたは、結婚前の性交渉をどう思いますか。次の中からあなたの考えに一番近いものを選んで下さい。

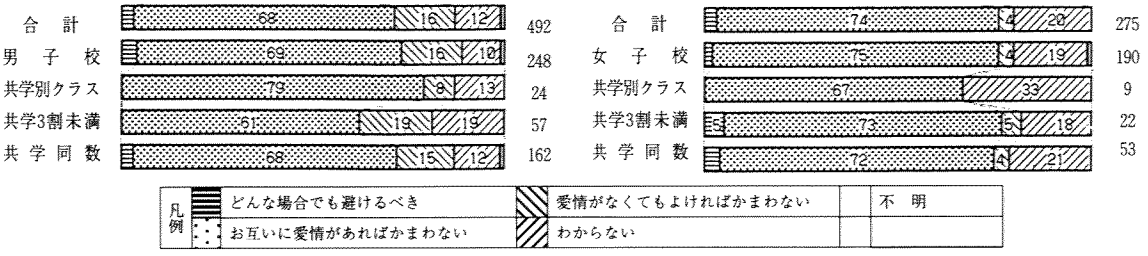
回答結果は別学共学出身者の差はない。注目す

図６　異　性　観

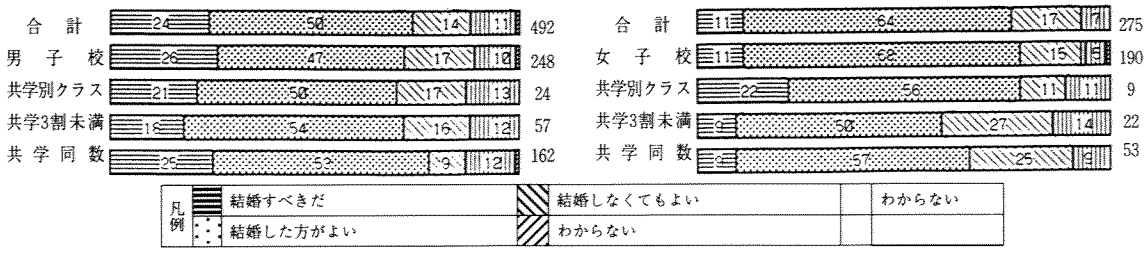
６－１　あなたは親しい友人がいますか。もしいる場合、その友人は、同性ですか異性ですか、それとも両方ですか




６－２　あなたは、結婚前の性交渉をどう思いますか。次の中からあなたの考えに一番近いものを選んで下さい。




６－３　あなたは、結婚前というものについて、一般的にどう考えていますか。次の中からあなたの１番近いものを選んで下さい。



べきは「お互いに愛情があればかまわない」とする者は女子が多く、「愛情がなくてもよければかまわない」は男子が多い点と「どんな場合でも避けるべきだ」とする者が男女共2.8 %～2.6 %しかいない点である。「日本青年意識調査[7]」にみると「どんな場合でも避けるべきだ」とする者は、調査年の5年前にはそれ以前に比べ半減し、1988年は9.3 %になっている。時代と共に少なくなってゆく意識と考えられるが、本調査の数字は更に低く、最低のフランスより低い。また「愛情がなくてもよければかまわない」の男子16%は同調査の4.5 %を大きく上廻っている。

男女平等意識に基づく性役割観をもたない男子には「性」もまた利己的な、放恣な意識であることが考えられる。これらの意識がどのように育てられてきたか明らかではないが、問題点のひとつといえる。

(3) あなたは結婚というものについて、一般的にどう考えていますか。次の中からあなたの考えに一番近いものを選んで下さい。

この回答結果も別学共学出身者による差はない。注目すべきは男女差で「結婚すべきだ」とする者は男子が女子の2倍くらい多い。そして「しなくてもよい」は女子の方が多い。結婚願望が男子に大きいというより、女子の方が伝統的結婚観にしばられていないといえよう。日本青年意識調査[7]と比較すると、男子の場合その割合に大きな違いはない。

これらの結果から本調査の男子の場合、日本の青年と比較して結婚に対する意識には違いがないものの、性役割意識や性意識に大きな違いがあるといえる。(図6－1、6－2、6－3参照)

(4) あなたは高校時代に性役割、性差、男女平等などについて授業をうけた経験がありますか。

(5) あなたは高校時代に性教育の授業をうけた経験がありますか。

(6) あなたは高校時代に性を理由にいじめを受けた経験がありますか。

異性観に高校での学習等の影響があるかを質問した結果、3問とも別学共学出身者による差はない。(4) は経験のある者は半数であり、男子より女子が多い。どの教科で受けたのかは問わなかったが、この差は「家庭一般」であろうと推測される。(5) は経験がある者が半数であり、男女差もない。

女子全員が「家庭一般」を履習している筈であるが、性役割・性差・男女平等を学習していないと認識している者が半数もいるということは、家庭科の授業内容に問題がある。家事労働や家族関係の中で性役割分業意識がもつ意味が学習内容として展開されないでいると考えられる。

何を性教育とするか明確には捉えられていないと考えるが、学習したとする者は男女共半数である。性の問題は生理的知識のみでなく、性のもたらす心理的葛藤や情緒的安定に及ぼす影響など人間のあり方と関わる性のあり方を学習してこそ性役割や男女平等観へ連動してゆくと考える。

(6) の性を理由に差別やいじめをうけた経験のある者は殆どいないが、女子共学3割未満に14%と目立つが実数は3人である。

## Ⅳ 要　約

公立別学高等学校数が全国で際立って多い福島県の中等教育の共学、別学という学校形態について学習主体者である生徒自身の意見を知るため、高校生活を回顧できる発達段階にある福島大学生2年生を対象としてアンケート調査をおこなった。

集計結果を男女別々に別学校出身者と性別数に格差の少ない共学校出身者を比較して考察すると次の結果がみられる。

1．福島大学学生の福島県出身者の場合、性別数の格差が少ない共学校出身者は13%で、殆ど別学校或いは共学でも男女別クラス或いはどちらかの性別が3割未満の変則的共学校出身者である。

2．高校生活を回顧すると「とてもよかった」「まあまあよかった」とする者は男女共75～85%になる。この評価の共学別学校による差は男子の場合はないが、女子は共学校出身者の方が「よかった」とする者が多く「いやだった」とする者は少ない。

3．よかった或いはいやだったとする理由について共学校出身者と別学校出身者では差がある。

4．共学或いは別学という学校形態に対する評価は形態出身者間で大きな差があり、別学校出身者が別学であった事をよかったとする者は半数であるが、共学校出身者が共学であった事をよかったとする者は80～90%になる。またいやだったとする者は別学校出身者が17～14%なのに共学校出身

者は0.6 ～2 %に過ぎず、学校形態に対する評価は共学校の方が高い。

5．高校進学の際の選択に別学を考慮した者は少なく、共学であることを選択した者の方が多い。進学校に別学校が多い状況は中学生の高校選択権を侵害しているといわねばならない。

6．別学校の利点に対する意見として、別学校出身者は気楽であることには賛成が多いものの、勉強に集中できる、不純異性交遊がおきにくいなどを否定する意見が多く、これらの利点は共学校出身者にも賛成されていない。

7．別学校の問題点とされる異性との交流、相互理解に関して、これらができにくいことに共学校出身者より別学校出身者の方が賛成をしている。共学体験による実態より、別学校出身者がこれらに対して不安感を強くもっていることがうかがえ、特に女子にこの傾向が大きい。

8．別学という形態は男女平等の社会にふさわしくない意見について別学校出身者の賛意は半数に満たないが、伝統を守ってゆかねばならないとする意見の賛成は13%、6 %と低い。

9．「男は外、女は家庭」の意見に男子の場合別学校出身者の賛成が高く、保守的性役割観をもっている。しかし「なんともいえない」とする者が女子や日本青年意識調査に比べて大きく、固定的役割観の脱皮を図ろうとしながらも確信がもてずにいる価値観の動揺がみられる。また家事分担に対する意見として性役割分担にこだわらない回答もこだわる回答も別学校出身者に多く、個人差が大きく、性役割認識の変革に迫られている状況が考察できる。

10. 同性と異性両方の親しい友人がいる者は男女共、共学校出身者が多く、別学校出身者は高校卒業後の一年間では共学大学生活であっても異性の友人はできにくいと思われる。

11. 結婚前の性交渉に対する意見は共学別学出身者では差はないが、愛情がなくてもよければかまわない意見は男子が女子より多く、どんな場合も避けるべきとする意見は日本青年意識調査に比べ低率である。一方結婚すべきだとする意見は日本青年意識調査と変わらず、結婚と性に対する意識のずれが大きい。

12. 性役割や性について高校での学習経験は多くなく、今後これらについて高校の指導のあり方を構築してゆかなければならないと考える。

福島大学学生にあっては高校の別学について肯定せず、別学校出身者は別学であったことに不安感をもち、性役割意識や性に対する考え方に問題をもっているといえる。

本論文は、調査項目の作成、実施、集計分析にあたっては、武藤・羽田が共同しておこない、執筆は武藤がおこなった。

〔引用文献〕

1) 阿部彰、戦後地方教育制度成立過程の研究、風間書房、(1983)
2) 武藤八恵子、公立高等学校における別学校成立と家庭科の関連、日本家庭科教育学会誌投稿中
3) 橋本紀子、男女共学制の史的研究、大月書店、(1992) p365 ～390
4) 平成３年度全国高校便覧 (1990)
5) 橋本紀子、前掲書　p379～380
6) 会津女子高校新聞　平成3年12月17日発行
7) 総務庁青少年対策本部、世界の青年との比較からみた日本の青年（世界青年意識調査第４回報告書）(1989)
8) 内藤道子、性差の見られる男女平等観と家庭科教育、ＫＧＫジャーナル (1992)